

宮地嘉六著作集

第一卷

宮地嘉六著作集 第一卷

一九八四年一月二十日発行

定 価 三 千 円

編集者 宮地嘉六著作集編集委員会

発行者 宮 嶋 秀

印刷所 株式会社 開明堂

製本所 株式会社 松本製本所

発行所 慶友社

東京都千代田区駿河台三の七 荻野ビル
電話(一九三)八九八三

凡 例

一、本著作集の収録文は、原則として著者の単行本を底本とし、初出及びその後の刊本と校合した。著者書き入れ本のある場合はそれを参照した。単行本未収録の著作は初出によったが、収録されている著作でも特に初出によった場合がある。それらの異同などは「後記」に注記した。

一、収録文は、底本に忠実であることを原則とし、仮名遣い・送り仮名・著者固有の表現などはそのままとした。ただし、漢字は新字体に改め、明らかな誤字・脱字・句読点の欠落などは適宜加除訂正をした。

一、振り仮名は、総ルビの文も含めて難読・特殊な読みなどの最少限にとどめた。

目 次

鉄工場	3
煤煙の市	9
佐吉	16
卒塔婆の家	29
窮迫と幻想	47
その一人	61
免囚者の如く	79
煤煙の臭ひ	96
風の叫び	133
甕	147
河岸の強人	165
彼の生涯の第二期	192

騷擾後……………	216
ある職工の手記……………	236
音戸の瀬戸……………	268
雙六の駒……………	302
第三の継母……………	320
後記……………堀切利高……………	331

宮地嘉六著作集 第一卷

監修 小田切秀雄
編集 堀切利高

森本修

黒古一夫

宮地彌生子

大和田茂

印刻 宮地嘉六

鉄工場

柄にもない海軍の仕事を請合つてしたゝか手を焼いた親方の顔にはいやが上に貧乏髯が伸びた。

十五日の勘定が二十日に延びたのは、皆も仕方がないと諦めたが、さあそれが三十日になつても駄目だと来たのでたまらない。親方の姿は朝から見えなかつた。急ぐ仕事を打つちやり放しにしてお午ひるから皆んな帰らうなど、職人の一人が言ひ出したので、其の氣になつてしまつた。お午休みにはまだ箱を打ち壊してドンドン焚し始めた。そして一時は尻しつぽに過ぎたが誰も仕事にかゝるものはなかつた。然うかと云つて手でも洗つて帰らうとしなかつた。そこへ弁当屋の内儀さんが殻箱を取りに来た。

「まあなんて寒い日だらう、皆んな仕事しないが何うしたの……。」

「きまつてら、金もくれねえのに誰が仕事なんかしてえんだ。まあ好いからおあたりよ内儀さん、何うせ弁当代なんか取れつこはねえやな……。」

と衆公が内儀さんを火の側に引き寄せて何かお尻のあたりへ妙なことをした。

「何をするのだうるさいねえ。」

と内儀さんは衆公の手をひんねぢた。

「いてえく……。」

内儀さんは衆公の側に割り込んで例のおしやべりを始めた。

「此の節、おめえんとこの弁当のまつさつたらねえぜ、何うせ弁当代なんか払はねえ積りだから我慢してるんだけど、毎日々々車麩に卵の花ぢや喰へやしねえや。俺達の胃袋はそんなお粗末に出来てねえんだからなあ」

「贅沢お云ひでないてことよ。お米のおまんまが有り難てい柄でさ。」

所へ親方がひよつこり戻つて来た。いきなり。

「みんな何うしたんだ。急ぎの仕事は分つてるぢやねえか、仕様がねえなッ。」

鍾馗が脂を舐めたやうな顔で、ズボンに足駄履と云ふ異様な着つけで其処ら一遍睨み廻つたが、「金公ッ」と一声荒く年季の金を呼びつけた。が返辞がないのでまた一声怒鳴呼びにした。金公は二声目に飛んで来た。

「何をしてるんだ畜生、朝つから言附けて置いた仕事はちつともしてやしねえ。俺が居ねえと思つて好い氣になつて怠けてやる。」

と取りあへず平手で四つばかり金の横面を張りまはして置いて、

「箱を打ち壊して焚いたのは誰れだい。此の火、消しちやへ、水持つて来てぶつかける。」

と哮りながら焚火を散々に蹴り散らした。

みんなは迂路々々して持ち場にいった。弁当屋の内儀さんは目真似をして行つてしまつた。

聴^{やが}て親方の姿は裏の鑄造場の方へ消えたかと思ふと、

「米公、そいつ打つちやつといてコークス問屋へ行つて来い。大きい車を曳て、金公を引っぱつて行

け。」

「ハイ」

米公は親方の内儀さんの甥で、反齒^{そつば}で背がひよろ高いところから、いろ／＼な綽名がつけられてあつた。大正業平、猿芝居の与市兵衛——これは顔に爺さんじみた皺が寄つて居るからで——また時たま赤い鼻汁を垂らすのでラデュームと誰かが呼び始めた。金公よりは二つばかり年上で兄弟子だが、グズである。

「米ちゃん、今日はおめえ曳く番だぜ。」

とズルイ金公の奴は車の上に乗つからうとした。

「ふざけるな畜生、手前が曳く番ぢやねえか。」と米公が承知しない。

「ぢや俺が煙草屋の角まで乗るから、それからおめえ乗んなよ、好いだらう。」

「うまく云つてやがらあ、下りろよ。下りねえか畜生、図々しい野郎だなあ、早く行かねえとまた親方に叱られるぢやねえかこらッ……。」

米公は梶棒をうんと上げ下げして揺り下さうとしても金公は嚙り附いて下りない。米公は仕方なしにガラ／＼曳いて金公を乗せて行つた。戸外は寒い風が黄色い埃を吹きまくつて居た。

それから少時^{しばらく}して、ヨボ／＼した禿頭の老俤夫が空俤を曳いて通りが／＼つたが窓際にやつて来て「今日は」と挨拶をする。私は仕事をしながら何の用かと思つた。

「あの、金の野郎、ちよつとお呼びなすつておくんないな。」と老俤夫は云つた。で、

「金公は今、使ひに行つて居ませんが……。」と私は云つた。

「あ然うでげすか、ぢや相済みませんが、こいつを何うか、野郎に渡しておくんないな。」と冬着らしい風呂敷包を窓から差し入れる。其処へ金公等は帰つて来た。裏へ車を曳き入れて、米公と二人で俵入のコークスを抱へ下す。顔が真黒で眼ばかり光つてゐる金公の姿を親爺は窓越に眺めて、親らしい潤んだ眼を注いで、人の好きさうな笑顔を作つた。

「金公ッ」私が声をかけてやる。と金公は窓際に走つて来た。

「着物を持つて来たから汚さねえやうに着ろよ。おばあさんが逢てえいひつてから、暇の時分に親方にさう願つて一晩帰つて来い、よ……電車賃やつてくから。」と親爺は小声で云つた。

「あ……」金公はブツキラ棒に答へて包を受取つた。親爺は何んだか物足らぬ顔をして、工場の中の様子や、油だらけの機械の廻つて居る様などを珍らしさうに覗いて居たが、また乗せる客でも欲しさうに通りの人を見たりした。そして腹掛のどんぶりから二十錢銀貨を一つ探り出して、

「皆やつちやつてや困るんだけど、十錢金がねえから、まあ持つて居る、直ぐ費つちやいけねえぞ——皆さんに教つて仕事^{きそは}を覚へるんだぜ——何分どうかお頼み申します。」

と私達にも二度ばかり頭を下げて、またがら／＼と空俵を曳いて行つた。

「金公、親爺にお金^{おし}貰つたな、幾ら貰つたんだよ。」と金公が云つた。

「二十錢だよ。」金公はイヤに威張つてかう云つた。

「俺に預けて置かねえか、勘定貰つたら二十五錢にして返さあな、よつ。」
「いやなこつた。」

金公は眼を赤に剝いて、鼻に小皺を寄せて裏の方へ飛んで行つた。

「金公は何所へ行つたか知らないか。」

誰かゞ探して居る。と鑢て彼はそつと横町の三河屋へ行つて二銭の大盛をしこたま喰つて歸つて来た。そして巻煙草を吹かして居る。

「何処へ行つたんだ。餓鬼のクセに巻煙草なんか吸つてるぜ、一本やらねえか俺様に。」と云ひざま、金公は金公の耳朵をうんと引張つた。

「痛えなツ、誰だと思つてやんだ。」

と兄哥あにいを氣取つた声色で、大きな耳朵をさすり／＼剽軽な面をする。

「金公、俺とは好い仲ぢやねえか、三本位黙つて居ても呉れるもんだ。」とまた一人が横合から手を出す。

「うるせえな、三べん廻つてワンと云ひな。」と氣の利いた仇口をきく。

「おい皆して取つちやを……此野郎ツ。」と逃げる奴を、

「とつつかまへろ。」と取りまいた。

だが金公は猿のやうに巧みに、シャフトの廻つてゐる天井へ上つた。危ねえから下りろと云ふ間もなく「あいたあ／＼／＼……。」と悲鳴をあげた。

「アツ捲かれたツ、機械停めろツ、停めろ……」

機械が停まるとバタリと金公の身体はシャフトからぶら下つた。皆はうろたへた。

「梯子はないかツ。」と叫ぶ。

「ウーン／＼。」呻く奴を抱き下ろした時は親方も裏から走り出て来た。そして

「ボヤ／＼してるからだ、馬鹿ッ」

と大声で怒鳴った。生きてるか死んでるか分らないのを戸板に乗つけて最寄りの医者へ運んで行く時は、皆な蒼い顔になった。糸公は戸板の後からついて行つた。

親方は米公に塩を持つて来させて穢れた機械に振り撒いた。

煤煙の市

一

私はいろいろな乗客と共に薄ら寒い船中で一夜を明した。瀬戸内海の暗い潮路を、夜更けて渡る旅人は皆一様に黙つて落人のやうな疲弊と暗愁とに溺んだ眼を閉ぢて、港々で吹き鳴らす汽笛の音にも破られ易い夢路を辿るのだつた。琴平参宮の爺婆の一組、四国地辺から遙々奉公に出て、久しぶりに親元へ帰るらしい年若な女や、一座の後を追ひ行く田舎巡りの女優や、汽船はさうした旅客を暗い夜の港々に揚げた。そして翌朝の九時頃△△軍港へ入つた。私は幾年ぶりかで△△の市街をなつかしく眺めた。

私が最初此の軍港地へ来たのは未だ十七位の時であつた。其の時分、私はもう少年職工として一人前の衣食には余りある工賃を貰つて居た。早くから旅へ出て自活の道を求めねばならなかつたのも邪慳な継母故であつた。私には此の△△市街ほど思ひ出多い土地はない。赤や黄や紫や、さうした色々な毒草の花は、諸方から此の新開の都市に移し植ゑられて時を得顔に咲き乱れ、そして早熟した少年の心をどんなに酔はせたであらう。それらは私が若き日の思ひ出を飾る花環である。私が半生の哀史に織り込まれて、僅かながらに華やかな青春を想起せしむる色彩である。

「お前は何処へ放浪の身となつても必ず此の△△の地を思ひ出さずには居られない。そして必ずまた此の地へ戻つて来ずには居らないであらう。」

私が此の地を立ち去る時のこと、ふと然ういふ心の囁きを感じた。そして遂に私は其の弱き心の予言に背くことが出来なかつたのだ。

「△△軍港、其処が汝の安住の天地である。十年来手馴れた機械のハンドルは汝を待つて居る。働いて喰ひ、働いて飲む労働者の生活ほど幸ある生活があらうか、老いてなほ自己の適所を定めざる人間程不幸なものがある。汝は煤煙を厭ふ、然しそれは最初汝が職業を選び得なかつた罪ではないか。今はもう生きるといふ目的に忠実なれ……」

と斯様に思ひ詰めた結果が私を此の地へ来らしめたのであつた。

「ほれ、あそこが造船廠や、大きな工場やないか。」

甲板の手摺に靠れながら、舳の来る間を彼方の海岸のどよもしに眼を放つて居た青服の男は、ゆびさして傍に寄り添ふ若い女に云つた。

「まあ、大層な煙だんなあ。」と女は眼をあげて云つた。

少し隔てゝ同じ手摺に靠れながら煙深い彼方を眺めて居た私は、何気なく此等二人を見やつた。男は此の船の船員かと思違ふやうな色の褪めた着晒の青服を着て、女の肩掛見たいなものを頸に巻きつけて無精らしい風体をして居る。女は未だ二十前後の小柄である。二人は昨夜どこかの、名も知れぬ小さな港から夜中に乗船した者であつた。彼等も私と同じく此の△△地へ上つてひと稼ぎしようといふ職工に違ひはなかつた。昨夜はよつぱ薄暗い船室の隅つこで、何か頻りと小声で語り合つて居たこ